

米政府保健機関、ワクチンの恐ろしい副作用の隠ぺいが 顕われる

CDC（米疾病予防管理センター）が暴かれる

【訳者注】この論文の内容は、根本は単純で、子供の自然の水ぼうそうを、ワクチンで抑え込もうとすると、かえって、悪性のヘルペスの蔓延となって帰ってくるという発見と、その発見をした科学者の受けた迫害の物語である。これは、同じようなテーマの、沢山ある記事の一つで、かなり学術的に厳密に書かれているので、専門家にもご覧いただきたい。他にどんなものがあるかは、次のタイトルを読むだけで十分であろう：――

- ・トップ・ドクターが警鐘：“CDC は恐ろしい HPV（子宮頸がん）ワクチンについてウソをついている”
- ・医者による「反ワクチン・ビデオ」：警察が逮捕の構えを示す
- ・スウェーデンの研究が、子宮頸がんが HPV ワクチンで起こることを発見
- ・CDC 職員が警鐘：アメリカに恐ろしいウィルスを拡散させる謀略がある

これを見ただけで、問題がいかに深刻かがわかるだろう。このタイトルからは、良心的な勇気ある科学者がいくらでもいるようだが、実際は、良心をなくした、あるいは脅されて仕事をしている研究者が多いと思われる。

Daniel Newton, www.neonettle.com

May 10, 2018



CDC（アメリカ疾病予防管理センター）が長老科学者たちによって暴かれる

CDC が、ワクチンの恐ろしい副作用を隠すために、データの改ざんや、不正な研究方法の採用といった、さまざまなトリックを用いている実態を押さえられた。

CDC (アメリカ疾病予防管理センター) が、年長の科学者や、ワクチン批判者たちによって、そのいかがわしい習慣が「普通であって、まれな例外ではない」ようになるにつれて、その非倫理的な作業実態を暴露された。 <http://www.neonnettle.com/tags/vaccine>

Annals of Clinical Pathology (臨床病理学年報) に載ったある論文によれば、CDC は、彼らの Universal Varicella Vaccination Program (大規模水痘ワクチン接種計画?) を含め、ワクチンに関する重要な研究調査結果を、積極的に抑圧している実態が明らかになった。

<http://www.neonnettle.com/features/1349-jim-carrey-cdc-is-poisoning-our-children-with-vaccines->

ある独立したコンピューター科学者によると、CDC とその地方公衆衛生パートナーの間には“癒着”があって、一般大衆からの“望ましくない”水痘の産物のセンターになっているという。



1つのウィルス、2つの病気

自然の水痘 (水ぼうそう、varicella-zoster ウィルスによって生ずる) は、1990 年代以前には、通常の子供の経験するもので、これは長期免疫によって現実に抑えられていた。

1995 年に、CDC は、水痘ワクチンを、生後 12~15 か月の子供を対象とする、子供ワクチ

ン計画につけ加えた。

Infowars によれば、2006 年に CDC は、ワクチンの効果が薄れている問題を認め、4～6 歳の子供は、2 度目の注射を受ける必要があると通知した。

参考資料：「CDC 医師：破局的インフル注射が、恐ろしいインフル爆発を引き起こした」

<http://www.neonnettle.com/news/3617-cdc-doctor-catastrophic-flu-shot-has-triggered-a-deadly-flu-outbreak->

一度、自然の水疱瘡にかかると、ウィルスは体の中にずっと潜伏する。

人生の後に（通常は、免疫不全の成人で）再びこれが活発になると、このウィルスは、帯状疱疹（herpes zoster または HZ）の形で再び表面に現れる。

ワクチンが導入される前には、自然の水疱瘡が、共同体にかなり行きわたっていたために、細胞媒体免疫と呼ばれる、一種の免疫が常時つくり出されることによって、ほとんどの成人は帯状疱疹（ヘルペス）にかからずに済んだ。

実際、ある 2002 年の研究は、子供と一緒に暮らしている大人は、自然の水疱瘡にさらされるために、「ヘルペスに対しては高度に保護されている」ことを明らかにした。

これらの論文著者は、大規模の水疱ワクチン接種は、大規模のヘルペスの蔓延を引き起こす可能性があるとして警告し、ヘルペスは、「ワクチン接種が導入されたとき、10～44 歳だった人々の 50%以上」を罹病させると予言した。

ワクチンの導入の前と後に、研究者たちはまた、ワクチンが、水疱瘡にかかる平均年齢を引き上げ、逆に、ヘルペスにかかる平均年齢を下げるだろうと警告した。そして、成人の方が水疱瘡は重いだろうというシナリオが、提出されていた。

予言から現実へ

先の「年報」の論文著者は、1995 年に、CDC の基金による「Varicella 監視活動計画」を通じて、ロスアンゼルス保健局に、研究アナリストとして採用された。

このプロジェクトの、内部完結的な、地理的局所性という特殊な理由から、それは特別に質

の高いデータと、「途切れることのない、安定したデータ収集」が得られるという利点をもっていた。

したがって、このリサーチ・アナリストは、水痘ワクチン接種計画の成り行きを、その当初からモニターし、プラス・マイナス両方の結果を査定することのできる、理想的な立場にいた。

最初は、彼の唯一の命令は、varicella（水痘ウイルス）のデータを分析することだった。しかし、2000年になって、逸話的な、学校の看護師からの報告が漏れてくるようになり、「就学年齢の子供たちの中の、説明のできないHZ（ヘルペス）症例の増加」が取りざたされるようになると、このアナリストは、CDCに対し、彼の仕事に、ヘルペスの監視活動を加えるように要請した。年月を待たずして、この二重の監視活動は、**水痘ワクチン接種計画の、明らかにネガティブな結果**を導き出した：――

広く行われている水痘ワクチン接種は、「自然の水疱瘡を経験した子供たちに、ヘルペスの（形での）再発を加速する」もので、それは「どんな歴史的な研究に」発表されたものより、はるかに高い率によるものだった。

かつては、「このような高いHZ（ヘルペス）の発症率は…年長の成人に見られたもので、子供ではなかった。」

大量の水痘ワクチン接種計画は、また、「成人におけるヘルペス再発の可能性を増大させている。」

このどちらの発見も、自分たちのワクチン計画を、間違いない成功として公表しようと懸命になっていた、公衆衛生担当局にとっては、有り難くないものだった。

ごまかしと不正行為

この時点から、アナリストが嫌気がさして2002年に辞めるまで、CDCは、彼らに「マイナスの、あるいは不利な効果をもつ」研究結果の発表を、継続的に、あるいは断続的に禁止した。そして彼らは、「ごまかしと不正行為に寄与する」少なくとも23の個別の活動に携わった。

参考資料：「医者がインフル注射に警告：これはガンを蔓延させる意図がある」

<http://www.neonettle.com/news/3758-doctor-blows-whistle-on-flu-shot-it-s-designed-to-spread-cancer->

この調査結果を“埋葬する”ある馬鹿げた試みにおいて、このプロジェクトの研究者たちは、「この監視計画は、ヘルペス発症の率を研究する、適切な土台を提供するものでないと、単純な、あやしげな手口を使った議論を展開した。」

CDCと地方衛生局は、このリサーチ・アナリストを、彼の雇用中からその後になんて指図した。その行動はこういったものだった：――

- ・「ヘルペス症例の傾向の分析を、これ以上続けない」ように彼に指導した。
- ・最初のものから1年もたたないうちに、2度目のヘルペス発症を報告した患者に、接触する許可を与えなかった。
- ・人身攻撃を用いて、彼の名誉を貶めようとした。
- ・彼の辞職以後は、「彼がすべてのデータと結果を客観的に公表しようとしたとき、医学雑誌への発表を〈やめよ、控えよ〉」という通知をよこし、雑誌の編集者には、発表を延期するように圧力をかけた。

症例報告も同様に、「ワクチン種の zoster は、健康な子供にでも、meningitis や encephalitis のような、神経の混乱を起こさせるほど強烈なもの」だと言っている。

CDC の見解とは反対に、「臨床病理学年報」の論文著者は、このプログラムは「病気と治療の作られたサイクル」をもたらしたという主張を、反論できないものにした。それはかなりの医療費負担となり、すべての時代の、ワクチンを受けた者、受けなかった者の、悩みの種となった。

別のところで、論文著者は、その娘が4歳の時に varicella ワクチン（水痘ワクチン）を受けた親の話を用いている。その子は自然の水疱瘡にかかったことがなく、その後、13歳と16歳のときに、それがヘルペスとして帰ってきて、激しい痛みを経験した。その親は、「一生残る、恐ろしい副作用をもつ、危険なワクチン」を受けさせたことを残念がり、「それは幼い時の水疱瘡よりも、遥かにひどいものだ」と言った。

最近、イタリアの科学者たちが、習慣になった水痘ワクチン接種プログラムは、「本来的に敵対関係にある、水疱瘡とヘルペスの間の力学」のゆえに、「タチの悪い公衆衛生問題」に発展する可能性があると言った。

同様に、CDCのように、ワクチンの普及を義務としながら、同時にワクチンの安全に責任を持つ政府部局は、一般大衆の利益にはならない本来の葛藤をもっている。

10年以上前に、雑誌 Nature のある論説が、ワクチンの安全性に対する、子供の両親の信頼が薄くなっていると論じ、「健康保護の問題に関して、政府と一般大衆の信頼を、ともに得られるような、十分な能力に基づいた、独立した国家機関」を設立することが「強く望まれる」と結論した。

ジョンズ・ホプキンス大学の研究者たちも、同じように、「最善のワクチン安全を確保するために」CDC や他の政府機関とは離れた、独立の国家ワクチン安全委員会を設立することを要請した。こうした重要な勧告に基づいて、行動すべき時が来ている。

——以上